



第60回産経大阪杯(GII) 優勝馬 アンビシャス



春の天皇賞から宝塚記念へと続く中長距離路線における重要な一戦として、毎年のようにハイレベルなメンバーを集めてきた産経大阪杯。この2016年もまた、そんな歴史を裏切らないレースが繰り広げられた。

出走馬11頭中、GI馬は5頭。前年のJRA賞最優秀4歳以上牡馬に輝いたラブリーデイを筆頭に、ジャパンカップの覇者ショウナンパンドラ、菊花賞馬キタサンブラック、5歳を迎えた皐月賞馬イスラボニータ、オークス馬ヌーヴォレコルトといった豪華メンバーが揃う中、2番人気にはアンビシャスが推された。まだ重賞はGⅢのラジオNIKKEI賞を勝ったのみだが、前走の中山記念では鋭く追い込みドラメンテにクビ差の2着。GI級の力を示し、評価を高めていた。

なにがなんでも逃げたい馬はおらず、キタサンブラックが先手を取ってレースは始まった。マイネルラクリマが2番手を確保するが、そこへスタートは一息だったアンビシャスが勢いよく外から迫っていく。2コーナーではマイネルラクリマを交わして単独の2番手に上がり、さらに前へと行きたがるアンビシャスを、しかし鞍上の横山典弘騎手はなんとかなだめることに成功し、隊列が落ち着く。

ゆったりと逃げたキタサンブラックの武豊騎手は、3コーナー過ぎから徐々にペースを上げていく。直線を向くと一気に後続を離しにかかり、完全に勝ちパターンに持ち込んだが、これにただ1頭食らいついていったのがアンビシャスだった。粘るキタ



▲先頭で直線に入ったキタサンブラック(帽色・緑・左)を追うアンビシャス(帽色・橙・左)。

サンブラックを瞬発力の差でじわじわ追い詰め、最後はねじ伏せるように前に出てゴール。中団の外から懸命に追い込んだショウナンパンドラが3着で、以下、6着までずらりと並んだGIホースたちをまとめて負かす、内容の濃い勝利となった。

振り返れば、古くはステートジャガーがミスターシービーを競り負かしたり、テイエムオペラオーが伏兵トホウドリームの4着に沈んだりしたレース。この前年も、牝馬のラキシスがキズナを2馬身突き放してあと言わせた。逆転劇の伝統はグレードが変わっても受け継がれるのか。GI昇格初年度の今年は、そんなところにも注目してみたい。



▲横山典弘騎手の好騎乗で、並みいるGI馬たちを退けたアンビシャス。

第60回産経大阪杯(GII)

4/3 阪神競馬場 2000m(芝・右) 曇・良 11頭

着順	馬名	性別	年齢	斤量	騎手	調教師	タイム/着差	人気	通過順位
1	アンビシャス	牡	4	56	横山 典弘	音無 秀孝	1:59.3	②	2 2 2 2
2	キタサンブラック	牡	4	58	武 豊	清水 久詞	クビ	⑤	1 1 1 1
3	ショウナンパンドラ	牝	5	56	池添 謙一	高野 友和	1 1/4	④	5 5 5 3
4	ラブリーデイ	牡	6	58	M. デムーロ	池江 泰寿	1 1/2	①	7 7 5 6
5	イスラボニータ	牡	5	57	蛸名 正義	栗田 博憲	1	⑦	5 5 5 6
6	ヌーヴォレコルト	牝	5	54	岩田 康誠	斎藤 誠	1/2	③	4 3 3 3
7	レッドレイヴン	牡	6	56	柴田 善臣	藤沢 和雄	クビ	⑧	9 9 8 9
8	アクションスター	牡	6	56	松若 風馬	音無 秀孝	2 1/2	⑩	10 10 10 9
9	タッチングスピーチ	牝	4	54	福永 祐一	石坂 正	クビ	⑥	7 7 8 6
10	マイネルラクリマ	牡	8	56	丹内 祐次	上原 博之	1/2	⑨	2 3 3 3
11	ニシノビーquick	牡	7	56	国分 恭介	竹内 正洋	2	⑪	11 10 10 11

単勝 ③390円 複勝 ⑨160円 ⑦190円 ⑥190円 枠連(6-7)520円

馬連 ⑦-⑨1,470円 馬単 ⑨-⑦2,510円 ワイド ⑦-⑨530円 ⑧-⑨500円 ⑦-⑧620円

3連複 ⑦-⑧-⑨2,540円 3連単 ⑨-⑦-⑧12,810円

ハロンタイム 12.8-11.5-12.5-12.1-12.2-12.5-12.1-11.3-10.9-11.4

通過タイム 600m ③36.8-800m ④48.9-1000m ⑤1:01.1-1200m ⑥1:13.6-1400m ⑦1:25.7-

1600m ⑧1:37.0-1800m ⑨1:47.9

優勝馬 アンビシャス

2012.2.17生 父ディーブインパクト 母カーニバルソング 母の父エルコンドルパサー
浦河・辻牧場生産 馬主：近藤英子氏